

2008年11月4日発行

江戸遺跡研究会会報

No.116

江戸遺跡研究会

<http://www.ao.jpn.org/edo/>

◎第118回例会は下記の通り行います。木曜日に行います。◎

第118回例会のご案内

日 時：2008年11月20日（水）19：00～

内 容：鈴木裕子（株式会社 四 門）・村田香澄氏
「江戸遺跡出土の小型樽について」

会 場：江戸東京博物館 学習室2

交 通：JR総武線両国駅西口改札 徒歩3分
都営地下鉄大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室
03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト
<http://www.ao.jpn.org/edo/>



◇江戸遺跡研究会第117回例会は、2008年9月17日（火）午後19時00分より江戸東京博物館学習室◇
◇2にて行われ、西山博章之氏より以下の内容が報告されました。◇

江戸城跡・北の丸公園地区の調査

西山 博章

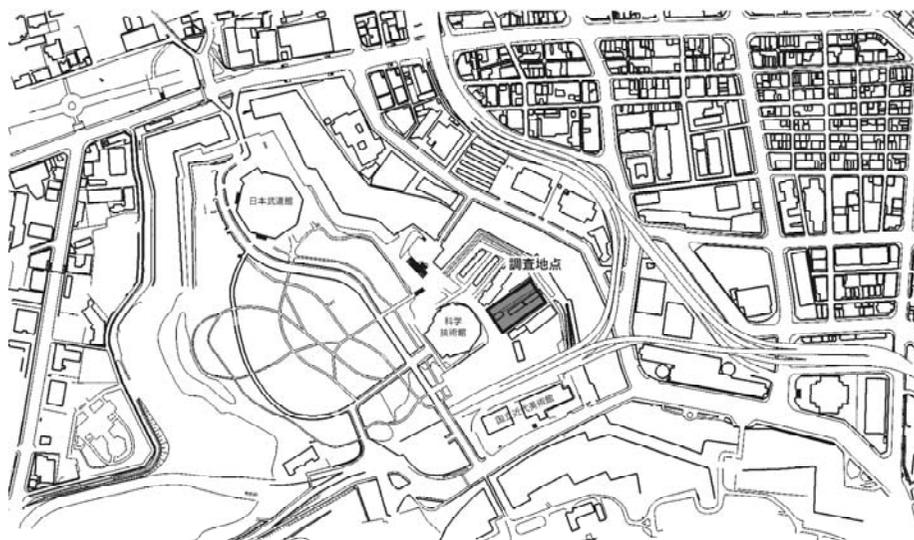
（東京都埋蔵文化財センター）

1. はじめに

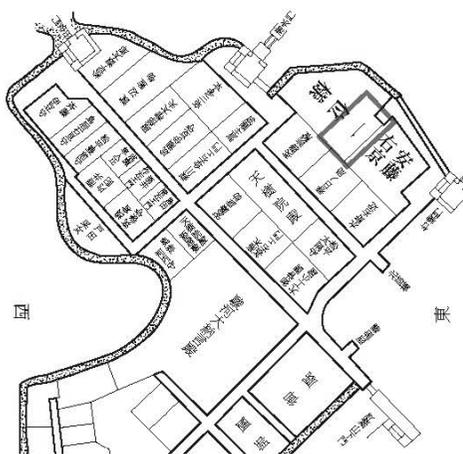
今回の調査は、財務省による公務員宿舎建て替え工事に伴い、平成19年9月下旬から平成20年2月末にかけて実施された。調査面積は1,580㎡である。整理作業は、場所を世田谷区に移して平成20年3月から行なっており、平成21年3月の報告書刊行に向けて現在作業中である。

2. 遺跡の沿革

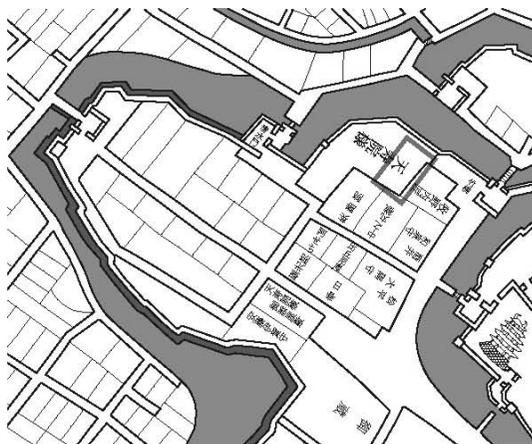
調査対象地は、江戸城跡（千代田区 No.1遺跡）として登録された広大な遺跡の中の北側、現北の丸公園東端部の一段低い清水濠に面した場所に位置する。西側は約8mほどの比高差をもって科学技術館の建つ高台となっており、東側は約7mの比高差で清水濠の水面となる。この地点は、慶長期に始まる江戸城普請以前は「竹やぶ」などと書かれ（別本慶長江戸図等）、ほとんど開発の手は入っていなかったようである。その後の天下普請により次第に整備され、慶長13年（1608）のものとされる「慶長江戸図」には「竹藪」に囲まれた屋敷の区画が描かれるようになっている。慶長20年（1615）の「大坂夏の陣」後に再開され、元和6年（1620）までに行われた北の丸の普請により、当地周辺の造成はほぼ完了したようである。



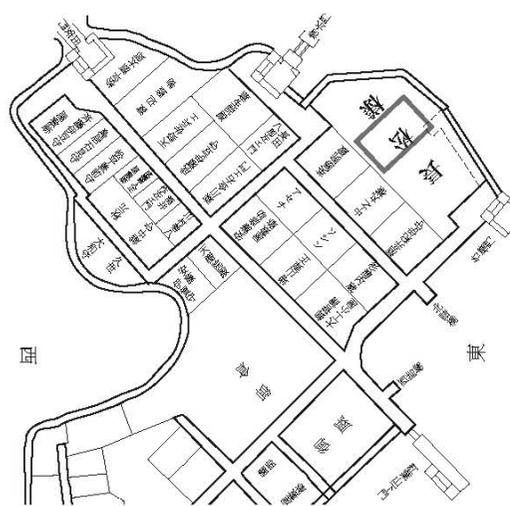
第1図 遺跡の位置



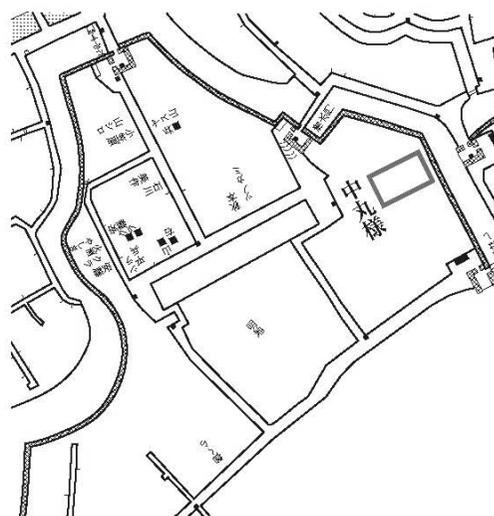
「御府内沿革図書」 <寛永年中之形>
(1624~1644)



「寛永江戸全図」 (1643~44)



「御府内沿革図書」 <承応年中之形>
(1652~1655)



「新版江戸大絵図」 <寛文五枚図>
(1670)

第2図 絵図に見る調査地点の変遷

寛永年間の様子を描いた「御府内沿革図書（寛永年中の形）」によると、調査地点には「一位様」「安藤右京」の名が見える。「一位様」は徳川家康の側室「阿茶の局」のことであり、安藤右京は上野高崎藩主安藤重長である。寛永 10年（1633）頃に一位様は神田橋に屋敷を移し、この地は「天寿（樹）院様」の屋敷となる。また安藤右京の屋敷は寛永 13年（1636）に牧野内匠頭の手に移っている。寛永末年頃（1643～44）を描いたとされる「寛永江戸全図」には「天寿院様」と「牧野内匠」名が見られる。「天樹院様」は徳川秀忠の娘「千姫」であり、幼くして嫁いだ豊臣秀頼の亡き後、再度嫁いだ本多忠刻にも先立たれたことから、出家して江戸に戻り、北の丸に屋敷を構えたとされている。牧野内匠頭の屋敷は慶安元年（1648）に、徳川家光の次男「長松」（寛永 21年 5月生）の屋敷に代わり、「正保江戸図」には「天寿院様」と「長松様」の屋敷とが並んで描かれている。長松は後の甲府宰相として知られる徳川綱重である。明暦 3年（1657）の大火によりこれらの屋敷はことごとく焼け落ち、その後には家光の正室であった「中丸様」（本理院＝鷹司孝子）が屋敷を構える。この屋敷は寛文 8年（1668）に火災に遭うもののすぐに再建され、寛文 10年（1670）刊行の新版江戸大絵図（寛文五枚図）には広大な敷地の区画が見られる。延宝 2年（1674）に本理院が亡くなると屋敷は取り払われ、それ以降幕末まで当地は「蔵地」として使用された。蔵地としては「勘定方書物蔵」「米蔵」「鉄砲蔵」「大筒置場」などの名称が見られ、様々な用途に用いられたようである。また幕末期には災害時の廃棄物仮置場にも使用したと記録に残されている。明治になると北の丸一帯は陸軍用地となり、近衛兵関連の施設が建てられるようになる。その内、調査地点付近は前代からの「鉄砲蔵」を引き継いだのか、近衛砲兵営として使用されていた。

3. 遺跡の層序

1) 遺構面の設定と焼土

発掘調査の結果、大きく 3枚の生活面が検出されたほか、天下普請に関わる大規模な盛り土造成の状況が確認された。3枚の生活面はさらに細かく分けられ、遺構の確認面としては現在までのところ 8枚を設定している。大別した 3枚の生活面はそれぞれ広範囲にわたって焼土層に覆われており、これが遺構の時期決定の大きな鍵となっている。各種の記録に残された火災の記事と照合すると、下層の焼土は寛永 16年（1639）の本丸焼失の火災による可能性が高いと推測される。この火災は、本丸は大きな被害を受けたものの北の丸へ

の影響は記されておらず、その詳細はまだ不明な点が多い。

中層の焼土層はその層厚も厚く、非常に多量の被熱瓦を含んでいることから、江戸城天守閣も焼け落ちた明暦 3年（1657）の大火によるものと推測される。上層の焼土層は、下位の焼土層の直上で検出されている。つまり明暦の大火からそれほど時をおかずに発生した火災であり、記録に残る寛文 8年（1668）の火災であると推測される。

2) 盛り土造成

今回の調査では遺構面の調査後に 4箇所を深掘りを実施し、北の丸造成に関わる盛り土の状況を確認した。その結果、以下のような状況を確認することが出来た。北の丸でも東縁部にあたるこの

地点は、元来は西から東へと下る傾斜地であったが、それを大きく数段に分割して切り土し、東側を土留め（石垣）した上で切り土によって作出した平坦面上に盛り土を施し、最終的に生活面となり得る平坦面を広範囲に作り出している。切り土の状況は現科学技術館の東側斜面にも残されており、最大で 8mほどを測るが、東側へいくほど浅くなる傾向が見取れる。調査区内では推定で 3段の切り土が為されていたようである。盛り土に伴う土留めは、造成時には恐らく仮の構造物を設置していたと思われるが、今回の調査では確認されなかった。最終的には現清水濠の石垣が土留めとなっている。盛り土は非常に複雑な状況を呈している。主にロームを主体とする土壌を用いているが、部分的には締まりのない黒色土も確認されている。また、水平に堆積している部分が基本となっているが、盛り土時の傾斜に沿ったような斜位の堆積（あえて斜位にしている）も見られ、その工法には注目すべき点が多いと思われる。今回の調査で確認出来た盛り土の深さは東側の最深部で 7m、西側で 4.5mとなっている。なお調査前には、北の丸造成前の時代、つまり中世段階の遺構の検出も期待されたのであるが、前述のように天下普請に伴う大規模な切り土により、当時の地表面の大部分が削平されてしまっており、わずかに廃棄された貝類とそこに混入した捏ね鉢一点を確認したのみである。

4. 検出された遺構

1) I期の遺構・遺物

元和 6年（1620）に北の丸の造成が終了した直後の最初期の整地面で確認された遺構群である。調査区西側では部分的に 2枚の整地層が確認されており、細分を検討している。この段階は、寛永 10年頃までは「一位様」、その後は「天寿院様」の屋敷地とされている。検出された主な遺構は、礎石建物跡、根石を有する大形の柱穴列、木組みの溝、ムロ状遺構、池状遺構、杭列、土坑、植栽痕等である。前述のように西側では整地層が 2枚確認されており、遺構の重複も著しい状況が確認されている、またこの地点でのみ大形の柱穴が検出されている。調査区中央部で確認された礎石建物跡は周囲を木組み溝で囲われており、植栽痕がその外周に配されている様子が窺える。

遺物はムロ状遺構及び土坑からの出土が多く見られた。傾向としては肥前産の磁器はほとんど見られず、中国産（景德鎮）の磁器染付（青花）がその主体となっている。またその器種構成も碗が主体で、それ以外の器種がほとんど見られないといった特徴がある。そのほか、複数の遺構から大量のカワラケが出土しており、その多くが灯明皿として使用されたものである点が注目される。なお 1点のみであるが金箔瓦が出土している。

2) II期の遺構・遺物

明暦の大火による焼土に覆われた遺構群である。前時期の火災後、河川堆積土状の土壌によって 20～50cmの嵩上げが行われ、それまで若干の高低差が見られた敷地内の平坦化が為されている。この段階は、「天寿院様」及び「長松様」の屋敷地とされている。検出された遺構は礎石建物、石組み溝、木組み溝、上水関連遺構（木樋・柵）、井戸状遺構、地鎮関連遺構、土坑等であり、これらの遺構の

多くは覆土の主体が焼土を多量に含むもの、もしくは焼土のみである。この内、調査区南側を東西に走る大形の石組溝は、その位置が「寛永江戸図」に見られる「天寿院様」と「牧野内匠」の屋敷境の区画と一致しており、寛永期以降明暦大火までの間の屋敷の区画（天寿院邸と長松邸）がそれほど変化していないことを確認することが出来た。また、調査区北西隅で検出された木組みの遺構からは、2本の刀（短刀・脇差）と3本の緞銭、さらに10枚近いカワラケが出土しており、その性格についてはさらなる検討が必要である。出土遺物は、依然中国産の磁器が見られるものの、肥前産の磁器もその割合は高くなっている。注目すべきものとして、前述の屋敷境と推測される石組溝内より一体の人骨が出土している。50～60歳代の男性と推定されているこの人骨は、溝の底面に仰向けに倒れ込んでおり、その上には分厚い焼土が堆積していた。身体の上面の骨は激しく熱を受けて炭化した状態であるのに対し、下面は蒸されたような状態であり、さらにその下からは炭化した布製品が出土している。これらの状況から、この人物は大火の炎に追われ、逃げ遅れたのか屋敷境の溝に落ち、悲しいことにその後の片付けの際に見過ごされて焼土に覆われてしまった、と推測される。およそ10万人が亡くなったとされる明暦の大火において、直接の被害者としては、遺跡では初の確認事例であろう。

3) III期の遺構・遺物

寛文8年の火災による焼土層に覆われた遺構群である。明暦の大火後、大量の焼土を均した上にロームを主体とする盛り土によって全体を30cmほど嵩上げし、整地面を作っている。この段階は、敷地全体が「中丸様」の屋敷地とされている。検出された遺構は、礎石建物、石組み溝、石敷き遺構、石組みカマド、柱穴列、瓦組み遺構、土坑等である。調査区中央部で検出された石組み溝は、前時期の石組み溝とほぼ同一の位置に構築されており、さらに使用されている石材もそのほとんどが前代の溝からの転用と推測されている。また、前代で屋敷境に比定された大形の石組み溝とほぼ同一軸方向に延びる石組み溝も検出されており、大きな火災の前後で居住者も替わっているにも関わらず、屋敷内の施設構成がそれほど変化していないということが判明した。この段階の遺物は、現時点では詳細を検討していないため詳述出来ないが、中国産の磁器染付（青花）はあまり見られなくなり、肥前産の磁器が主体を占めるようになる。

4) IV期の遺構・遺物

寛文8年の火災による焼土層直上の整地面に構築された遺構群である。後世の削平による影響か、火災後の盛り土整地は顕著には見られず、各遺構の検出は焼土直上となっている。部分的にはわずかな盛り土上に砂利敷きの層が認められており、細分の可能性を残している。この段階は、寛文8年の火災後はそれ以前に建っていた中丸様（本理院）の屋敷が再建されるが、延宝2年（1674）に亡くなられた後は「蔵地」としての使用が開始されている。検出された遺構は、礎石建物、木組み溝、ムロ状遺構、瓦組み遺構、土坑等である。確実のこの時期と認定される遺構数は少ないものの、重複関係等から時期差が存在していることは確実であり、これが「中丸様」段階と「蔵地」段階の差異であると考えている。特徴的な遺構としては、前代よりもやや規模の大きくなるムロ状遺構があり、調査区南部で検出された方形の遺構からは、灰化した紙製品・印章・銭貨が出土する。勘定方の書物蔵が存在していたとの記録もあり、興味深い遺構である。この段階の遺物は、III期と同様に詳細

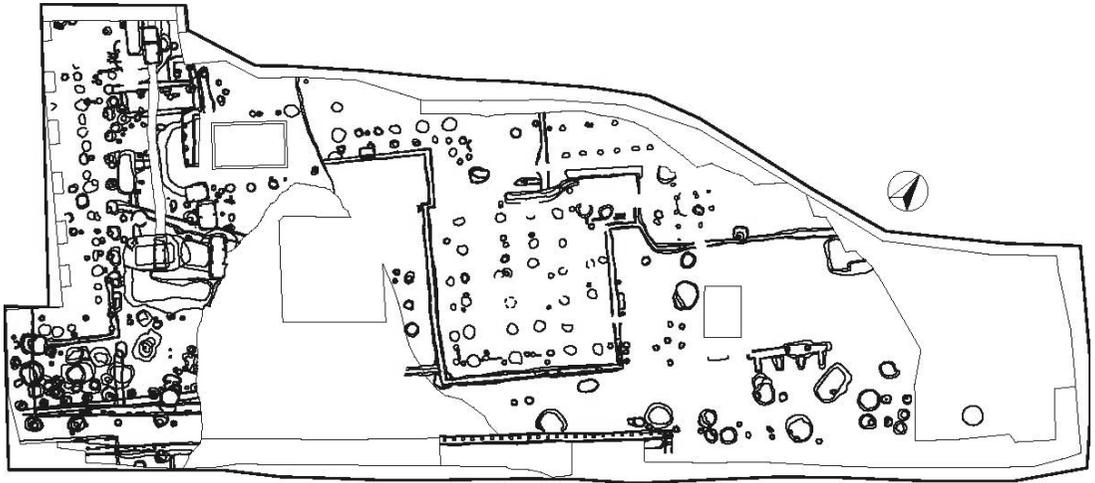
を検討していないため詳述は差し控えたい。

5) V期の遺構・遺物

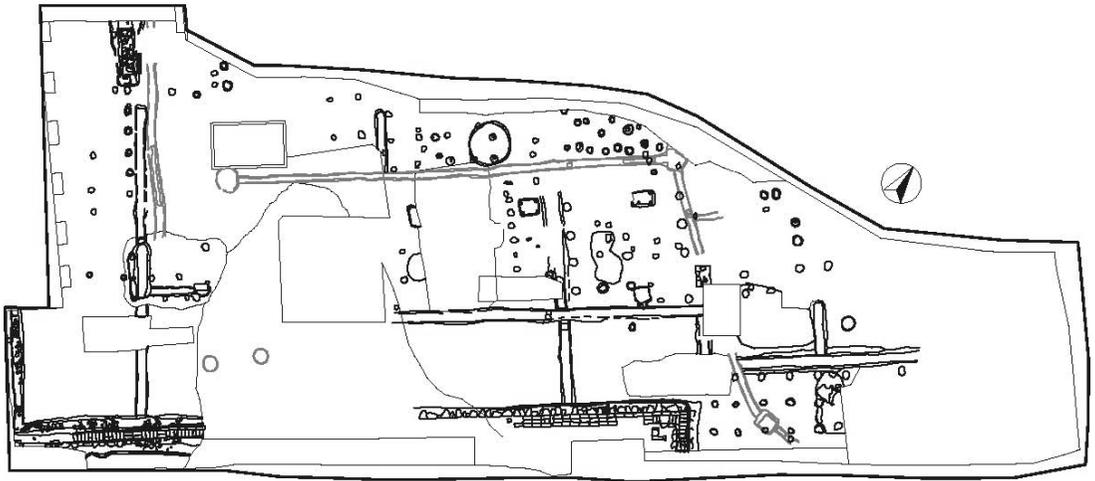
19世紀半ばから幕末期にかけての遺構群である。IV期の遺構面より上層においては、近代以降の削平によってその大部分が失われており、面としての確認は出来ない状況である。そのため、検出された遺構はいずれも大規模に掘削された、主に瓦等の廃棄によって発生した大形の土坑のみとなっている。調査区中央部に大きく広がる大土坑は、上層は覆土のほとんどが瓦で占められているが、下層は間知石等の石材片が混入する粘質土壌が主体となっている。その形状や覆土の様相、出土遺物などから、幕末段階に発生した災害復旧のための土採り、そして廃棄物処理のための大規模な遺構であると推測される。この土坑からは各種の遺物が出土しているが、その中でも特徴的なものとして、磁器の大形植木鉢、「大奥」や「奥」等の釘書きが施された磁器碗や皿などが挙げられる。

5. おわりに

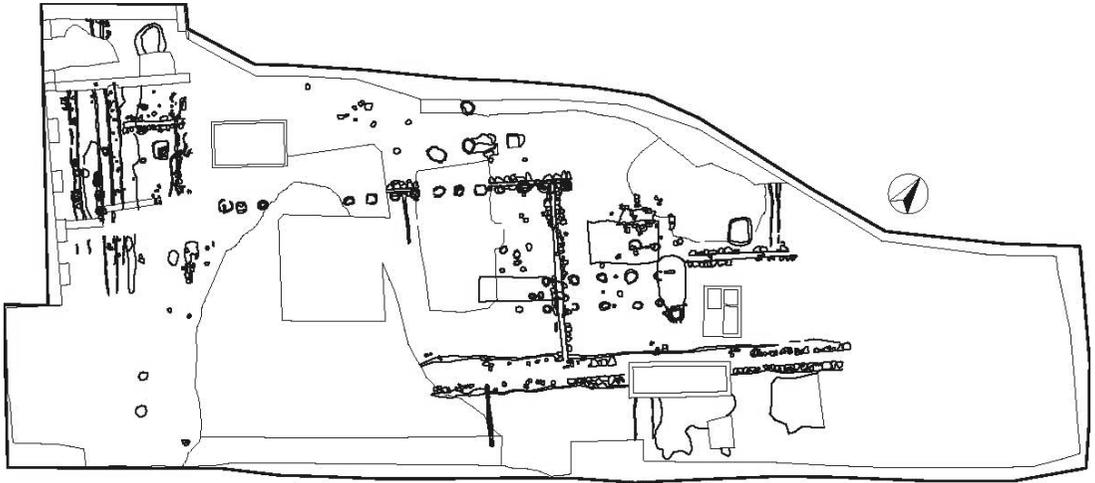
今回の報告は遺跡の概要報告が主体であり、現時点ではまだ遺物の詳細を検討していないため、各遺構面の帰属時期についても断定するまでには至っていない。今後の検討によって今回の報告とは異なる結果となる可能性が有ることはご了承いただきたい。報告書の刊行は平成 21年 3月の予定となっていますので、今しばらくお待ちください。



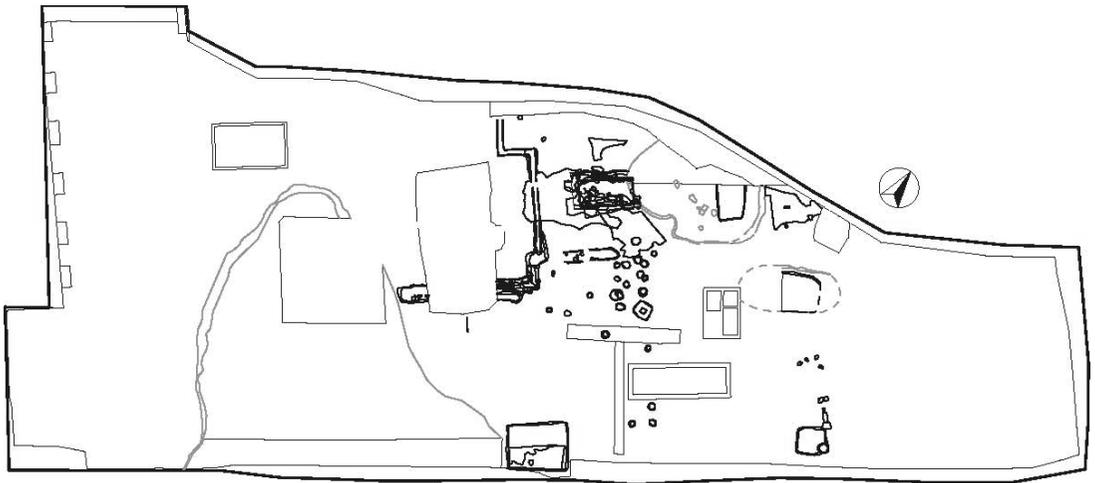
第3図 第I期の遺構全体図



第4図 第II期の遺構全体図



第5図 第Ⅲ期の遺構全体図



第6図 第Ⅳ～Ⅴ期の遺構全体図